http://decfamily.p1.bindsite.jp/2014/

We 35R

No.354　14/04/30

「伝える」ということ

前回の授業で若林幹生『社会学入門一歩前』（NTT出版、2007）という本を紹介したが、本当に勉強になる本（現代評論文入試に共通する発想の基本が学べる）なので、是非夏休みにでも読んでみてほしいと思う。それまでに学習した現代文教材の復習にもなる。ただし、第１章はちょっとネチネチしているので我慢して読むこと（ピンと来なくても気にせずに読む）。それを乗り越えると、第４章くらいから面白くなってくる。最後の「読書案内」には、社会学の名作が並べられていてかなり高度だが、だからこそ挑戦してみたい人にはイイ案内といえるだろう。

ところで、この若林さんの先生に当たる人が、『ちくま評論選』第五部に所載されている「コモリン岬」を書いた見田宗介先生である。（ちなみに『評論選』は日比谷高校の先生方が中心になって編集したのだが、この「コモリン岬」は私が提案した）。その見田さんの文章で好きなものがあるので紹介しよう。インドのエローラにある石窟寺院の仏陀像について述べた文章の一節である。

＊

このteaching Buddha の像は単独にあるのではなく、三つのブッダ像が並んで刻まれているうちのはじっこにある。ブッダが三人いるのではなく、「教える」ということに至るブッダの、三つの姿勢を時間を追って造形している。

最初にあるのが〝giving Buddha〟――「与えるブッダ」、あるいは自分を「明け渡す」という姿勢。自分をオープンにするという姿勢である。次にあるのが〝touching Buddha〟――「触れる」ということ、相手に触れる、ということである。「心に触れる」「魂に触れる」という日本語があるように、そして touch という英語にもまた、感動させる、心に触れるという意味があるように、もともとは相手の身体に触れる、実際に触れるという具体性からくるのだろうが、とにかく相手の存在の核の部分に「触れる」ということ。このことがその次にある。teaching pose ――「教える」ということが可能になるのは、この二つの後で初めて成り立つことである。

ぼくたちがひとに「伝える」ということがもしできるとしたら、どういう時にできるのだろうか。「伝える」ということが成り立たない時、それはどうして成り立たないのか。〈GIVING, TOUCHING & TEACHING〉というエローラの三つの像は、そのことの秘密に触れているように思う。「与える」こと、「触れる」こと、そのうえに初めて「伝える」ということが成り立つ。

伝えたいことが伝わらないということ。ぼくたちが生きてゆくうえで、そういう寂しい経験はいつでも起こる。そういう時を考えてみると、自分はその相手に対して、これまで何を与えてきただろう。あるいは何を触れてきただろう。相手のどこに触れることができていただろう。そういう仕方で考えてみると、「伝える」ことの成り立つはずのなかったことが明らかに見えてくることがある。何も与えてはいなかった時に、あるいは何も「触れる」ことのなかった時に、「伝える」などということが成り立つはずはない。

＊

伝えることの神髄に触れる名文だと思う。